

國學院大學学術情報リポジトリ

A re-evaluation of the "hanzei" system of the "Nanbokutyō" era

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hishinuma, Kazunori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000971

南北朝期半済制度の再評価―兵糧料所預置制度として―

菱沼 一憲

要旨

南北朝期、足利政権が行った半済は、荘園年貢・国衙正税の半分を兵糧に徴用し、将兵に給付する制度であるが、それは①本所領家の荘園支配を後退させ、在地領主の一円支配化を促した封建制度、②守護・地頭の侵略を一定程度に抑え込むための荘園保護政策という相反する評価がなされている。しかし①②に通底するのは、それが在地領主制の進展と、荘園制の維持を両立させるためのシステムという認識である。

こうした理解は観応半済令など追加法の解釈に基づくが、それら法令は半済の執行令ではなく半済停止令であり、施行令は戦況に応じて朝廷↓将軍↓守護という命令系統を経て、一国平均役として発布される。また半済が所領の一円化を促したとされるが、半済はあくまで「兵糧料所の預置」であり、時限給付という原則は不変で、一円化に直結しない。

こうした史料解釈によれば、半済とは勅許という最高位の立法に基づいて荘園公領を問わず、その年貢正税の半分を合法的に兵糧へ徴用する制度であり、半済は将軍↓守護の連携で兵士に兵糧料所として時限的に預け置くという「半済預置制度」なのである。こうした理解を九州探題今川了俊の実例で確認し、それが了俊の九州経営という政治的目的に沿って施行され、また在地領主制の発展を促す結果をもたらしていないことを示した。

半済預置制度は、朝廷・諸権門を統合した軍事体制の創設と、地域勢力の台頭を抑止しつつ軍事編成を促進するという、幕府の方針に基づいて創出された制度と考えられる。

【キーワード】南北朝期 半済 預置 兵糧料所 今川了俊